

台湾における媽祖廟および媽祖行列に関する調査報告 ～台北天后宮・龍山寺・關渡宮・北港朝天宮の实地調査 および「北港迎媽祖遶境體驗營」に参加して～

林 雅清・小林 康正・安田 ひろみ・中山 紀子

1 はじめに

筆者ら京都文教大学媽祖研究会は、これまで調査・分析を進めてきた日本国内における媽祖関連施設や媽祖関連行事、ひいては媽祖信仰の実態との比較検討を行う目的から、2023年度ともいき研究推進センター研究助成・センター指定研究A「東アジアにおける海外の民間信仰と宗教の習合に関する調査研究－媽祖をはじめとする海洋信仰を中心に」（研究代表者：潘宏立・林雅清）の研究調査の一環として、2023年5月5日～9日の5日間の日程で、台湾の媽祖関連施設の一部の实地調査と、媽祖関連行事への参加を実行した。

今回調査を行ったメンバーは、林雅清（京都文教大学こども教育学部准教授）・小林康正（京都文教大学総合社会学部教授）・安田ひろみ（京都文教大学総合社会学部准教授）・中山紀子（中部大学国際関係学部教授）の4名で、調査施設（媽祖関連の宗教施設）は、台北市内の龍山寺と天后宮、台北市郊外の關渡宮、雲林県北港鎮の北港朝天宮の4か所である。また調査期間中、農曆3月18・19日に当たる5月7・8日の両日には、台湾媽祖文化研究協会理事長の蔡相輝教授の招聘により、北港朝天宮が主催する「北

港迎媽祖遶境體驗營」（北港媽祖生誕祭パレード体験セミナー）に、調査メンバー全員が「學員」として参加することができ、そのセミナープログラムを修了した。

以下、今回の調査施設の様子と、当該セミナーの内容について報告する。

2 台北市内の媽祖祭祀施設 ～龍山寺・天后宮・關渡宮～

龍山寺

調査初日の5月5日の午後、台湾の桃園国際空港に各自到着したメンバーは、台北市内のホテルに集合し、台北市万華区の広州街211号に位置する龍山寺と、同じ万華区の成都路51号に位置する天后宮を实地調査した。

龍山寺（艋舺龍山寺）は、清朝の乾隆3年（1738年）、福建省泉州から渡ってきた移民によって、福建省晋江にある龍山寺の分靈を勧請して創建された仏教寺院で、本殿の本尊は木造の聖觀世音菩薩である。民国34年（1945年）、米軍の空襲により伽藍は倒壊したが、本尊の觀音像は被害を逃れたことから、現在でも信仰が厚いようである。本殿には觀音のほか、文殊菩薩・普賢菩薩・十八羅漢・韋馱護法・文殊菩薩が祀られている。

ただ、後殿には、文昌帝君・大魁星君・紫陽夫子・馬爺・天上聖母(媽祖)・太陽星君・太陰星君・註生娘娘・池頭夫人・十二婆者・水仙尊王・城隍爺・龍爺・福德正神・関聖帝君・三官大帝・華陀仙師・地藏王菩薩・月老神君といった道教神や民間信仰の神々が祀られており、それぞれに学問や商売、子宝祈願、恋愛成就などに功德があるとのことで、夜間でも各神像の前で真剣に祈願している参拝者の姿が絶え間なく見られた。

本殿前はもとより後殿にも多数の供物が供えられており、仏教・道教・民間信仰に拘らない台湾の人々の信仰の現状が見られた。



龍山寺媽祖像 (5/5 林撮影)

天后宮

龍山寺の次に訪れた天后宮(台北天后宮)は、西門町媽祖廟や艋舺媽祖宮とも呼ばれており、主祭神は天上聖母媽祖である。この天后宮は、清朝の乾隆11年(1746年)に商人の寄進によって「新興宮」という名称



夜の龍山寺本殿 (5/5 林撮影)

で建造され、当初は龍山寺や清水巖祖師廟と並ぶ艋舺(万華)地区の三大寺廟と呼ばれていたが、日本統治時代、防空道路を建設するために取り壊され、神像は信者によって一時的に龍山寺後殿に移された。太平洋戦争終結後、民国37年(1948年)に西門町に残されていた当時の高野山真言宗台湾別院「新高野山弘法寺」に移転された。

現在の天后宮は繁華街のビルの間にあり、道行く人々が廟前で立ち止まって手を合わせる姿も多くみられた。廟内も拝観料無しで自由に参拝できるようになっている。

廟内には媽祖や関聖帝君のほか、弘法大師も祀られていた。この弘法大師像は、上述の高野山真言宗台湾別院(明治29年(1896年)に布教所として開設、明治43年(1910年)に「新高野山弘法寺」としての建立許可を得、大正13年(1924年)に高野山真言宗台湾別院となり、太平洋戦争の終結をもって閉鎖)に安置されていたものであり、本弘法大師像ほか別院において祀られていた石仏や墓石等が天后宮移設後もそのまま安置され住民の参詣を受けていたことが、1970年代に高野山真言宗東京別院の調査によって明らかになったという。



台北天后宮正面 (5/5 林撮影)



天后宮内揭示の「高野山旧台湾別院
弘法大師参拝開創一千二百年記念
大法会啓白之文」(5/5 林撮影)

關渡宮

翌5月6日は、台北市の北の郊外(北投区知行路360号)に位置する關渡宮を調査した。

關渡宮は、清朝の康熙51年(1712年)、淡水河の「干豆門」に、台湾北部の「大鷄籠社」(基隆)の原住民族を統括していた通事の頼科鳩衆によって創建された、台湾

中南部の雲林県にある北港朝天宮に次ぐ歴史を有する大規模媽祖廟である。その後、康熙58年(1719年)に、象鼻山の山頂にあった天妃廟が現在の關渡宮付近の中腹あたりに移設された後、清代・日本統治時代を通じて度々修復され(暴風雨や日本兵の放火による火災による被害を含む)、太平洋戦争終結後、民国43～46年(1954～1957年)に大規模な修築を行い、正殿前方に媽祖、後方に観音、両脇に三官大帝・文昌帝君・註生娘娘を祀る伝統的な造りとなった。その後は民国51年(1962年)までは政府と市民で關渡宮を共同経営する形をとり、北投鎮公所が管理人を任命して民間で造営事業を担っていたが、民国58年(1969年)には正式に關渡宮「董事会」(取締役会)が成立し、財団法人台北市關渡宮が運営母体となった。前後して「五軒起三縦列」の建築様式を採用した再度の大規模改築が行われ、正殿の両脇にあった部屋を観音殿と文昌殿へと造り変え、正殿中央に媽祖殿、左に觀世音菩薩を祀る觀音仏祖殿、右に文昌帝君・闕聖鄭君・註生娘娘を祀る文昌帝君殿を布置、元の觀音殿は三階建ての凌霄宝殿へと改築し、一階の財神殿は知行路まで通路を開削し、駐車場を建造。また、古仏洞と新築の千手觀音殿から展望台へと至る通路をつなぎ、象鼻山の家屋を解体・移転した際に残された石材を用いて、裏山の靈山公園を整備したとのことである。現在は、主たる社殿の三川殿、拝殿、正殿(媽祖殿・觀音仏祖殿・文昌帝君殿)、凌霄宝殿のほか、山門、天壇、廟前広場、金炉、延平郡王三將軍廟、鐘樓・鼓樓、功德堂、菊寿閣、噴水池広場、廣渡寺、藥師仏祖殿、古仏殿、財神洞、懷英亭、靈山公園、展望台などの建造物・施設がある。また、随所に石彫や木彫のレリーフなども見られた。

調査当日は天上聖母生誕祭として春の

「護国祐民礼斗大会」（旧暦3月17日～25日の9日間）の開催期間中であり、各殿前において順次仏教僧と信者たちによる読経が行われていた。その法会に参加していた蔡相輝教授に同行を願い、關渡宮の各殿の紹介と祭祀に関する説明を受けた後、財団の董事会のメンバーとも交流し、意見交換を行った。

關渡宮の調査中、宗教の習合という観点から特に興味深かったのは、先の龍山寺のように仏教の仏菩薩と道教・民間信仰の神々が同列に祀られ信仰されている現状のほか、媽祖の祭礼において仏教僧が導師となって読経している点、そして、凌霄宝殿の中に祀られている道教神の三官大帝（天官・地官・水官）や玉皇上帝の前で、仏教の法服を身にまとった女性の信者たちが仏教経典を読誦している点である。三官大帝の前に置かれていた経本のタイトルは『佛門必備課誦本』であった。



關渡宮の裏門（財神洞の入口）および隣接する關渡宮図書館（5/6 林撮影）



關渡宮正殿前の供物壇（5/6 林撮影）



關渡宮凌霄宝殿内での信者による読経（5/6 林撮影）



關渡宮凌霄宝殿内の三官大帝像と『佛門必備課誦本』（5/6 林撮影）

3 北港朝天宮と「北港迎媽祖遶境體驗營」

關渡宮での調査・交流を終えると、台湾高速鉄道を利用して雲林県に向かった。5月7日と8日に、雲林県北港鎮中山路178号に位置する北港朝天宮とその祭祀儀礼の調査を兼ねて、北港朝天宮が主催する「北港迎媽祖遶境體驗營」（北港媽祖生誕祭パレード体験セミナー、以下セミナーという）に参加するためである。

北港朝天宮は、清朝の康熙33年（1694年）に創建され、古くは単に天妃廟や天后宮などと呼ばれていた。大陸の湄洲島にある媽祖廟の朝天閣から媽祖を勧請し、朝天宮と改称された。現在では、台湾における媽祖廟の総本山となっており、台湾全土から媽祖像を奉ってあるいは行列やパレード（遶境）をなして分霊をもらいに来る「進香」が毎日のように行われる。宮内には天上聖母（媽祖）をはじめ、観音菩薩や千里眼將軍・順風耳將軍などの仏像・神像が奉られている。

朝天宮の調査は、雲林県への移動直後の5月6日の夕刻から始めた。すでに媽祖行列・パレードが行われており、朝天宮への被り物をしての行列・進香や、神霊を自身の身体に降ろしてメッセージを伝える

シャーマンのタンキー（童乩）による憑依行為、轟音と猛煙の爆竹などが見られた。

セミナーでは、初日の7日は媽祖信仰や媽祖文化、あるいは媽祖祭・媽祖行列（パレード）に関する講義（中国語）を受講したほか、パレードの一部である「舞龍」や「神童」、あるいは爆竹に関するパフォーマンスの解説・体験を受けた。2日目の8日は、北港朝天宮において媽祖の「登轎」（媽祖行列の出発）の法会に参列し、媽祖行列や、「藝閣」と呼ばれる伝統工芸や電飾等で飾りつけて音楽を流しながらパレードする車両に乗る子供や女性の化粧、媽祖廟の護符の製作等を見学し、実際の行列における各種パフォーマンス（宗教儀礼）も一部体験することができた。



憑依状態のまま朝天宮に向かって路上を進むタンキー（5/6 林撮影）



朝天宮に地方からの媽祖行列が入っていく様子（5/6 林撮影）



「北港迎媽祖遶境體驗營」開会式の主催者挨拶（左端が蔡相輝教授、5/7 林撮影）



朝天宮境内において媽祖「登轎」の法会に参列する人々 (5/8 林撮影)



爆竹を鳴らしながら北港鎮の街中を進む虎將軍の行列 (5/8 林撮影)



北港鎮の道を行く「藝閣」のパレード (5/8 林撮影)

4 おわりに

今回の台湾調査では、本研究メンバーのうち研究代表者である中国国籍の潘宏立教授が中台の政治的事情もあり台湾への入境が叶わなかったが、他の日本側メンバーは全員参加することができ、それぞれの専門的知見を基に、台湾における媽祖信仰や媽祖関連行事について日本のそれらとも比較しながら、蔡教授や現地の行事参加者たちとの意見交換を行うことができた。短期間であったが、貴重な体験ができ極めて有意義な現地調査となった。

なお、今回調査した限りでは、北港朝天宮でも關渡宮でも、媽祖の祭祀に関して仏教僧が導師となり仏教經典の読経を中心とした仏教儀礼となっていたことが興味深く、今後は宗教の融合と民衆の受け止め方について、日本と台湾、あるいは中国や他のアジア諸国の現状とのより踏み込んだ比較研究を行う必要がある。今後の研究課題としたい。

また、台湾には台北市内だけでも、他に道教・仏教の神仏を数多く祀る台北市最大の媽祖廟といわれる松山慈祐宮や、中国遼寧省で造像された白玉製の媽祖像を祀る北投媽祖宮（慈后宮）など、信仰の実態を調査すべき媽祖関連施設が複数存在する。もちろん、台湾全域に目を向けると、更に数多くの大小様々な媽祖廟が点在し、各地各様の媽祖信仰が存在する。今後、調査を重ねることにより、中国・台湾・日本における媽祖信仰と他宗教との習合に関する歴史と展開がより明確になり、文化人類学や宗教学、ないしその隣接領域からの複眼的な視点から、媽祖信仰の実態と人々に与える影響についてより詳細に分析できるものと考えている。